

インドネシア帰国華僑から「中国系インドネシア系移民」へ

奈倉京子*

Identity and its Change of Indonesia-returned Chinese

NAGURA Kyoko*

The aim of this paper is to analyze how the Indonesia-returned Chinese have fitted in and adjusted to their identity from the perspective of political economy, habits and customs, inheritance of traditional Chinese culture, their relations among their internal groups in the Guangdong Taishan Haiyan Overseas Farm. And this paper examines the enlargement of the “Sino-Indonesian migrant” category.

Firstly, from political economy perspective, it can be clearly seen that Indonesia-returned Chinese have stronger economic strength in the Farm, thus they become the dominant group in the Farm. Secondly, Indonesia-returned Chinese consciously reinforce their identity-recognition through their publicity events, such as lifestyle exhibition of Indonesia-returned Chinese, Fengqingyuan (performance group with south-east Asian artistic favor) and TV program. Finally, this author carefully analyzes the alumni meetings between the Indonesia-returned Chinese and the Indonesia-overseas Chinese or those immigrated to a third country, and finds out that the Indonesia-returned Chinese and their related social circle.

キーワード：インドネシア帰国華僑，華僑農場，「中国系インドネシア系移民」，トランスナショナル

Keywords: Indonesia-returned Chinese, Overseas Farm, “Sino-Indonesian migrant”, Transnational

はじめに

これまで華僑華人に関して、経済学、歴史学、社会学、人類学など多領域にわたる多くの研究成果が出されてきた。その中で、東南アジア地域における人類学的方法を用いた研究に眼を向けてみると、代表的な研究に、華僑華人の僑居国（受入れ国）における文化的適応のプロセ

* 廈門大学人文学院ポストドクター；Post Doctoral Fellow, The School of Humanities of Xiamen University Nanguang Building, The School of Humanities, Xiamen University, P. R. China, 361005/ naicangjingzi714704@hotmail.com

スや中国伝統文化の維持の度合いなどについて研究した、スキナーのタイ華人社会研究 [1981], フリードマンのシンガポール華人社会研究 [1985 (中国語版)], それからマレーシアの麻坡鎮と呼ばれるある華人密集居住地における華人経済構造, 華人の家庭や宗教生活, 華人アイデンティティ, 地方幹部制度との関係について研究した李亦園の研究 [1970] などがある。これらの研究は, 文化習慣やアイデンティティが中国にあるか, 僑居国にあるか, またはその中間にあるかといった, ただ二国間を視野に入れた二元的な立場から考察するという点で共通している。そして1980年代以降, 東南アジアにおける華人について, エスニックグループの角度から「華族」の概念を用いて考察した研究も, しばしば「落葉帰根」(故郷中国の文化習慣を維持し, 中国にアイデンティティがある)か「落地生根」(僑居国の文化習慣を吸収, 時には同化させられて, 僑居国にアイデンティティをもつようになった)か, という語を用いて表現されるか, あるいは「中国(人)性」(chineseness)をどの程度維持しているかどうか, といった基準を用いて表現されてきた [例えば庄(編)2003; 曾2004; 梁2001等]。

このような華僑華人研究のパターンと本質主義的考察について, ゴスリング (Gosling, Peter L. A.) や三尾は, 新しい考察のパースペクティブが必要であることを提唱している。ゴスリングは, 華僑華人の文化変容及びアイデンティティを考察する際の新しい観点として重要なのは, 華僑華人が精錬された (refined) 中国文化を持っているという固定観念を捨て, 行為者の目線から華僑華人のアイデンティティの多様性や状況性に注目していくことであると述べている。例えば, 都市や農村といった居住地における職業階級 (working-class) に基づくアイデンティティといった粗雑な (coarse) 部分に目を向けることである [Gosling 1983: 1-14]。三尾もまた「中国系移民のアイデンティティを検討する議論は, 中国系移民が中国籍のままであった時代, 現地国家の国籍を取得した時代, また今日のトランスナショナルリズムの時代のいずれの時代においても, 何らかの「中国人 (Chineseness)」を保持してきたという本質主義的な不変論を内包しているという点で共通している」と指摘している [三尾2006: 85-86]。

次に, 帰国華僑研究について見てみると, その研究蓄積はあまり多くないが, 代表的なものとして, 廈門大学人類学研究所の李明歆, 劉朝暉, 孫晟, 俞雲平によってなされた福建松坪華僑農場と帰国華僑に関する考察が挙げられる。研究報告は『華僑華人歴史研究』(2003年6月第2期)に収められている。これらは人類学的方法を用いて帰国華僑の故郷意識, アイデンティティ, 集団の記憶などの角度から考察したもので, 本研究にもいくつかの切り口を与えてくれる。しかし, ここでも従来の華僑華人研究と同様の傾向が見られる。それは, 「当地社会 (農場周辺の地元の人々から成る社会)」と「帰国華僑社会 (農場社会)」という二元的視点から「帰国華僑」という周辺の集団が中心的な「当地社会」に溶け込んでいくといった一方向的な議論の傾向が見られることである。

筆者が調査した広東省台山海宴華僑農場 (以下農場と称す) の状況を上記の先行研究と突き

合わせて見ると、それらの枠組みでは分析することのできない問題が出てくる。農場の帰国華僑は周辺の「当地社会」に同化していくというよりむしろ、それとは隔離された農場の中で、いくつかの異なるグループ間の相互接触を通して自分が何者であるのかを自覚していく姿が見られる。そして「帰国華僑」という周辺の集団が中心的な「当地社会」に溶け込んでいくというよりは、帰国華僑を準拠集団として主体的に活動の範囲を広げ、そこでは国民国家の枠組みをも越えたトランスナショナルな拡大と、そのプロセスの中で「帰国華僑」というアイデンティティを越えていく姿が見られる。

このように動態的な帰国華僑について考察しようとする時、ジェームズ・チン・コーン (James Chin Kong) [2003] や芹澤 [1998, 2002] の香港における帰国華僑の研究が参考になる。彼らは、国民国家の枠組みの中で二元的な視角から考察する方法をのり越え、行為者の視点から彼らの紐帯にとって何が重要な要素になっているかといったことに留意した。ジェームズ・チン・コーンは 1950 年代から 60 年代にかけて東南アジア諸国から香港に戻ってきた帰国華僑¹⁾を対象に、ボランティア・アソシエーション (Voluntary Associations) の原理とメンバーの分析を通して、香港の帰国華僑のアイデンティティの多元性について論じている。注目すべき点は、香港の帰国華僑が中国大陸の本籍地や宗族の紐帯を中核としているのではなく元僑居国である東南アジアの各国にアイデンティティをもち、それを基準として集まっていることである [James Chin Kong 2003: 63-82]。これは従来の華僑華人が中国大陸の本籍地や宗族の紐帯を重視するという語りから、彼らのアイデンティティのシンボルとなる要素の変化と多様性を重視する視点への移行を示している。芹澤は、香港における帰国華僑の事例を通して「香港人」とも「ベトナム人」や「インドネシア人」とも言いがたい曖昧なアイデンティティに注目し、同様の経歴をもった移民同士が集まる独自の社会的関係について論じている [芹澤 1998: 145-171]。

また吉原は、サンフランシスコ同郷会の会員に関する考察を通してエスニシティが再構築していくプロセスを論じている。この同郷会はもともとインドシナ難民としての潮州人によって

1) ここでいう帰国華僑の中には、東南アジアから直接香港に戻った者以外にも、まず中国大陸に戻り、そこから香港に来た者も含まれている。本論で扱う帰国華僑は、1950 年代以降東南アジア諸国における国民国家形成の動きを背景に、華僑排斥運動に遭い、強制的に、あるいは自発的に中国 (大陸) に帰還した華僑華人を対象としている。中国政府は中国語学習などのために自発的に帰国した者を「帰国華僑」や「学生帰国華僑」、華僑排斥運動や戦争などのために帰国せざるを得なかった者を「難僑」と表現し、特にベトナム帰国華僑のことを「難民」、「インドシナ難民」、という言葉で表現する傾向にある [広東省地方史誌編纂委員会 1996: 213-225, 245-249; 広州市地方史誌編纂委員会 1996: 97-105]。また、フィッツジェラルド (Fitzgerald, Stephen) は “domestic Overseas Chinese” という語を用いているが、この語は 3 つの意味を含んでいる。1 つ目は、華裔、即ち中国国内に住む海外華僑華人が養う家族や親戚である。2 つ目は、海外から戻ってきた華僑のことを指す。3 つ目は、主に中国語の学習のために学生として一時的に帰国した海外華僑の子女である [Fitzgerald 1972]。本稿で用いる帰国華僑とは、基本的に東南アジア諸国から直接中国大陸に帰国した個人と集団双方を指すものとする。

立ち上げられたが、実際には、カルフォルニア北部のすべての潮州人を対象としており、香港、タイ、シンガポールなどから来た潮州人も会員になることができる。こうしてインドシナ難民というアイデンティティは徐々に薄らぎ、潮州人という核の下で新たなエスニシティが再構築されていった〔吉原 2000: 293-311, 2002: 5-18〕。

このような考察の立場は、バースのいうところの行為者 (actor) の視点から観察し、エスニックグループ形成の際に生成的視点 (a generative viewpoint) を重視すべきである〔Barth 1969: 9-38〕という指摘に通じる。

以上の研究は、ある固定したアイデンティティを静的かつ固定的に捉えるのではなく、構築主義的見地からアイデンティティの曖昧性、動態性、可塑性に留意していくという点で本研究に考察の切り口を与えてくれる。

本稿の目的は、広東省台山海宴華僑農場のインドネシア帰国華僑を考察の対象とし、インドネシア帰国華僑というアイデンティティの芽生え、醸成とそれを準拠集団にしながら更に帰国華僑という枠組みを越えて、中国、インドネシア双方に縁を持つ人々との接触を通して構築されつつある「中国系インドネシア系移民」というトランスナショナルなアイデンティティの芽生えについて、そのプロセスを考察することにある。

本稿で用いるデータ資料は、基本的に筆者が2005年3月から2006年10月までの期間に行った現地調査で得られたもの、及び2007年9月に福建省廈門市において関係者に対して行った聞き取りに基づいている²⁾。

I インドネシア帰国華僑という意識の芽生え

(1) 広東台山海宴華僑農場の概要

1949年以降、帰国華僑が東南アジア地域を中心とする僑居国内の政治運動などの影響を受けて、次々と中国大陸に帰国し始めた。中でも1960年代初め、インドネシア政府が突然大量

2) 筆者は2005年3月に初めて海宴華僑農場を訪れ、その後2005年6月から2006年4月にかけて海宴華僑農場に部屋を借り住み込んで調査を行った。2005年6月から9月の間華僑農場内のW村で調査を行い、主にインドネシア帰国華僑を対象に、彼らの生活経験や文化、習慣について理解した。その後、2005年10月から2006年4月にかけて、N村で調査を行い、ベトナム帰国華僑を対象に、彼らの生活経験や文化、習慣、及び日常生活におけるグループ間関係について理解した。調査中、農場幹部、村民委員会幹部といった上層部だけでなく、民間に深く入り込み、一般大衆との交流を重視し、同種の人々とのみ接触することを避けた。調査を通してしばしば交流した人々はW村N村合わせた総人口の約3分の2、非常に親しく付き合った家庭は約20世帯である。本論の一次資料は主にN村における調査で得たもので、特にN村民委員会の幹部であるP氏と夫人には行政面から人々の生活面に渡り多くの情報を提供していただいた。筆者はN村における調査中、P氏のご自宅で朝昼晩の食事をいただき、食事の時に自然な形で様々な情報を得ることができた。更に2006年10月に1週間の補充調査を行った。尚、本稿において人名は、任意のアルファベットを用いて表記するが、実名との関係はない。

の華僑を迫害したことを受けて、1960年2月2日、中国国務院は『帰国華僑の接待と安置について』を發布し、福建、広東の各地域に帰国華僑接待・安置委員会を設置することを命じた。1960年から1961年の間に広東省に落ちついた帰国華僑は54,000人にも上った。1960年以降、政府は広東、福建、広西、雲南を中心に30の国営華僑農場を創設した〔庄2001:278〕。2008年現在、依然として中国全国に84か所、広東省には23か所の華僑農場がある³⁾。

台山海宴華僑農場は、広東省台山市西南沿海部に位置する。1963年9月国務院華僑事務委員会（略して中僑委）によって主として東南アジア諸国で華僑排斥運動に遭い、帰国することになった（帰国せざるをえなくなった）帰国華僑を落ち着かせるために建設された。その歴史は40年余りで、現在の正式名称は「海僑経済開発区」である。しかし、内部で生活する人々は日常生活の中では今も尚「農場」の語を用いているため、本稿では一貫して「農場」を用いる。

2000年の総世帯数は1,672世帯、総人口は6,573人、その内男性は3,366人、女性は3,207人であり、帰国華僑は2,087人となっている〔海宴華僑農場編2004:37-40〕。2004年8月最新の行政改革が行われ、行政上、1つの居民委員会（S管理区）と3つの村民委員会（W村民委員会、N村民委員会とX村民委員会）からなる。そのうちW村は以前のH村を合併し、N村は以前のA村とB村を合併した。しかし、人々の意識上、それぞれの自然村を分けて認識しており、現在の農場の人々の視点からいうと、W村、N村、A村、B村、S管理区、H村、X村が用いられている。

帰国華僑のために創設された華僑農場であるが、その人口構成を見ると、帰国華僑ばかりではなく、複数の集団から成る（以下表1を参照）。

表1 海宴華僑農場の人口構成一覧表

年代	人口の種類	人口の出所	現在の居住地
1963年	インドネシア帰国華僑中心 その他タイ、シンガポール、 マレーシア、ミャンマー、 フィリピンなどの国から帰国した少数	広東省大南山華僑農場、 花県華僑農場、英徳華僑農場、 興隆華僑農場（現在海南省）	農場W村、N村、QS村
1964年9月至10月	学校で勉強していた帰国華僑。 （インドネシア帰国華僑中心） 知識青年	スフトー、広州	農場に残っている人は 少数で、大部分は広州など 外地へ
1965年	「本地人」	海宴鎮X村（合併による）	農場X村
1976年	外地人	潮州地区（人口分散政策のため）	農場に残っているのは 三人のみ。他は故郷に帰る か、深圳などの外地へ
1977、78年	ベトナム帰国華僑	ベトナム北部の広寧、海防など	農場W村、N村、QS村
	「本地人」	海宴鎮H村（合併による）	農場H村
1981年	砂糖工場の技術者	珠海平沙華僑農場の砂糖工場	農場QS村
1984年	ベトナム帰国華僑	台山鶴山華僑農場	農場HF下囲村

出典：海宴華僑農場編『農場誌（初稿）』（2004：37-40）及び、幹部と住民の聞き取りに基づき筆者作成。

3)「中国僑網」の「中国華僑農場」のページを参照した。<http://www.chinaqw.com.cn/hqnc/index.shtml> (2008年1月20日)。

まず、農場に住む人々は大きく帰国華僑と非帰国華僑に分けることができる。帰国華僑の中ではインドネシア帰国華僑とベトナム帰国華僑の占める割合が最も多い。村民委員会幹部に対する筆者の聞き取りによると、2004年のW村の総人口は807人、その内帰国華僑は520人、非帰国華僑は287人である。総世帯数は274世帯、その内帰国華僑世帯は157世帯、非帰国華僑世帯は117世帯である。2004年のN村の総人口は579人、その内帰国華僑は436人、非帰国華僑は143人である。総世帯数は182世帯、その内帰国華僑世帯は147世帯、非帰国華僑世帯は35世帯である。非帰国華僑は「本地人」、「臨工」（臨時労働者）とその他に分けられる。「本地人」の概念は曖昧であるが、もともと周辺の農村で、後から農場に合併されたH村とX村の人々や、農場周辺の海宴鎮内の村人を指している。「臨工」はサトウキビ生産やサトウキビ収穫期に砂糖工場の臨時労働者として農場へ来た人々を指す。

本研究では帰国華僑が集中的に居住しているW村、N村を調査対象の中心とした。まず2つの村の現在の人口構成と使用言語から見るグループの別について以下にまとめてみることにする。

表2 W村の帰国華僑

元僑居国	人数(人)
インドネシア	135
ベトナム	214
タイ	2
シンガポール	3
マレーシア	5
ミャンマー	2
フィリピン	2
帰国華僑子女	111
帰国華僑親族	46
合計	520

表3 N村の帰国華僑

元僑居国	人数(人)
インドネシア	73
ベトナム	248
インド	1
マレーシア	1
ミャンマー	1
帰国華僑子女	88
帰国華僑親族	24
合計	436

出典：資料は「海宴華僑農場帰国華僑、難僑基本情況調査表（2004年）」
（内部資料、村民委員会提供）を基に筆者作成。

帰国華僑についていうと、彼らは東南アジアの様々な国から帰国した人々で成り、これは農場が「小さな連合国」と形容される所以であるが、人口データから見ると、インドネシア華僑とベトナム華僑が中心であることがわかる（表2、3を参照のこと）。農場の帰国華僑の間では、1960年から1977年以前に帰国した人々を「老帰僑」、1977年以降に帰国した人々を「新帰僑」と呼んでいる。「老帰僑」は1963年、主に広東省大南山華僑農場、広東省花県華僑農場、広東省英徳華僑農場そして現在海南省の興隆華僑農場から分配されて来たインドネシア帰国華僑を中心に、タイ、シンガポール、マレーシア、ミャンマー、フィリピンなどから帰国した少数

の帰国華僑を含むが、農場内で「老帰僑」と言った場合、インドネシア帰国華僑を指すのが普通である。しかし、政治的経済的地位の角度からいうと、タイ、マレーシアなどの1960年代に農場に来た者は、職業と幹部などの重要なポストにおいてインドネシア帰国華僑と同等の待遇が与えられているため「老帰僑」の層に含むことができる。「新帰僑」は1977年から1978年にかけて帰国したベトナム帰国華僑を指す。

インドネシア帰国華僑の使用言語は多様であり、普通語、客家語、閩南語、インドネシア標準語、インドネシア地方語などがある。帰国前はそれぞれがそれぞれの土地でそれぞれの言葉を使用していたが、1960年から61年にかけて帰国後、意思疎通をするための共通言語がないと不便なため、徐々に普通語を習得していった。インドネシア帰国華僑における普通語普及率は大変高く、現在80歳以上の高齢者も普通語が堪能である。

ベトナム帰国華僑の普通語の普及率はインドネシア帰国華僑ほど高くない。彼らはベトナム時代、「白話」（広州語に近いが広西地方独特の発音や語彙を持つ言葉）を使用しており、帰国してからもそれがベトナム帰国華僑の共通語として機能している。彼らの中にはベトナム語が聞いて話せる者、そして書ける者も多くいるが、農場の稀なベトナム人に会う時以外は、基本的に「白話」でコミュニケーションをしている。しかし、農場内の他のグループの人々と意思疎通をする必要から、ベトナム農村部から帰国した高齢者を除いて、普通語を聞いて話すことができるし、日常生活の中でインドネシア帰国華僑との交流を通して客家語を覚えた者もいる。

以上の帰国した時期や使用言語の違いはインドネシア帰国華僑という意識を促す1つの重要な要素である。更にインドネシア帰国華僑の普通語の習得率が高いことにも注目すべきである。これは農場内部に限らず、外部ともコミュニケーションを取ろうとする際に有利に働くからである。

このような文化的違いの他に、共通の経験と記憶を共有していることもインドネシア帰国華僑という集団意識を芽生えさせる重要な要素を形成していると考えられる。以下では帰国から農場開拓、社会主義中国というイデオロギーの中における経済生活を中心に見ていくことになる。

(2) インドネシアからの帰国と新しい環境への適応

新中国成立以来、インドネシア帰国華僑が帰国を選択した理由は大きく2つある。1つは、僑居国で迫害を受けたため。もう1つは、両親が短期の計画で子どもに中国語を学習させるために中国へ帰したためであり、政府から「学生帰国華僑」と呼ばれた。本稿では迫害を受けたために帰国を選んだ人々に焦点を当て、帰国の帰路の様子と、帰国後、新しい生活環境の中でどのような困難に直面したかということについて、筆者の聞き取りに基づいて紹介したい。

W村に40代後半の男性U氏がいる。彼は1960年ジャワ中部から帰国した。その時の情況

について次のように語った。

華僑排斥に遭って中華学校が閉鎖されたので仕方なく帰国しました。もし華僑排斥がなかったら帰国したくありませんでした。帰って来る時、4階建ての大きな船に乗って帰ってきて、その中にはプールもありました。7日後やっと中国に着きました。船の中ではずっと「社会主義好！」の歌が流れていました。

U氏の親友でW村のR2氏もまた次のように話してくれた。

私の家族は1961年2月にスラバヤ(Surabaya)から船に乗りました。その船は中国が手配したソ連の「美上美」という船でした。U氏の船ほど高級で速くなく、13日後にやっと中国に着きました。私たちの船でも革命歌「社会主義好！」が流れていました。

二人の会話から、彼らの帰国には中国政府が関与していること、そしてインドネシアからの帰路、すでにゆっくりと彼らに対する当時の中国イデオロギーの注入が始まっていたことが見て取れる⁴⁾。

では、インドネシアから中国に帰国してからどのような生活が待ち受けていたのだろうか。当時の中国全体の社会背景について見てみると、1959年から1961年にかけて「三年自然災害」あるいは「三年困難」と呼ばれる非常に厳しい経済状況と生活環境にあった。これは自然環境の要因以外に、「大躍進」という急激な社会主義化を進めようとしたことの副作用として、経済的・政治的要因が引き起こしたという見解が現在中国国内でも中心を占めている〔周 2003: 54〕。つまり、インドネシア帰国華僑が帰国したばかりの中国国内の状況は、社会主義改革と自然災害の被害にあっている真只中にあり、厳しい生活環境に適応していかなければならなかった。

現在、海宴華僑農場に住む大部分のインドネシア帰国華僑は、まず広東省西部にある大南山華僑農場や恵来華僑農場に送られ、1963年、海宴華僑農場を新しく建設するに当たってそれぞれの華僑農場から移動してきた人々である。海宴華僑農場はもともと海の泥砂が海岸付近に沈積できた砂浜であり、開墾するのは容易ではなかった。インドネシア帰国華僑の中には農業

4) U氏とR2氏の話の内容は、2005年8月14日の夜、開店間近のW村のレストランで一緒にお酒を飲んだ時に聞いたものである。その時、二人の他にW村のZ氏(ベトナム帰国華僑)も一緒だった。この3人は酒友達でしばしば一緒にお酒を飲んでいる。R2氏は以下のIIの1「インドネシア帰国華僑家庭展覧室」において紹介するR2氏と同一人物である。

に従事した経験のある人は少なく、また一年を通して温暖なインドネシアの気候と農場との気候の差に適応できない人が多かった。従って、開墾作業は体力的にとっても厳しいものであった。また、男女の役割分担の違いといった、インドネシアの生活との相違にも適応していかなければならなかった。

例えば、N村のK氏（80歳）と妻Cさん（77歳）夫妻は、1961年K氏35歳、Cさん32歳の時に帰国した。二人は裕福な家庭に育ち、インドネシアでオランダ植民地政府の経営するミッション系の小学校を卒業した。1957年に結婚し、5人の息子に恵まれた。二人は帰国してから娘が欲しいと思っていた。しかし、その後、考えが変わった。Cさんは次のように語った。

インドネシアの頃は男性が外で働いて、女性は家で家事と子育てをすればよかったのですが、中国では女性も男性と同じように仕事をしなければなりません。中国の女性はとても大変だと思いました。それで、女の子が欲しいと思わなくなりました⁵⁾。

Cさんは当時、生産隊の下位集団である班の班長を務めたことがある。Cさんの記憶によると、生産隊は約30人からなり、その下はいくつかの班に分けられていた。班長は毎日その日の作業内容と班員の態度について記録し生産隊長に提出しなければならなかった⁶⁾。

以上の聞き取りから、まず経済生活の面において、個人の自由な職業の選択権はなく、これまで経験のない開墾作業や農作業に従事しなければならなかったこと、そして各自が生産隊に属し、統一された計画の下で作業を行うという社会主義的経済体制の中に組み込まれていったことがわかる。また女性は、専業主婦から開墾作業という極端な生活の変化に直面した。中でも30歳を過ぎてから急激な生活環境の変化に耐えなければならない人にとっては身体的かつ精神的苦痛が大きかった。

1958年から1966年までの政府の帰国華僑政策は、「社会主義建設を加速させるため国内にいる在外華僑の家族、帰国華僑、学生帰国華僑の積極性を引き出す」こと、「積極性を引き出す」ための手段は「国内にいる在外華僑の家族と帰国華僑に社会主義教育を施すこと」であった。そして主に3つの面から社会主義改造教育を実施した。第一に、国内にいる在外華僑の家族も帰国華僑も自力によって生活し、生産技術を上げる努力をしていくべきであるという考えに基づいた労働観念の教育。第二に、国内にいる在外華僑の家族や帰国華僑は、集団や国家利益があつての個人や華僑の利益だということを認識させ、国内にいる在外華僑の家族や帰国華僑に対する特別視をなくすという教育。第三に、迷信を打破し、質素儉約を重んじる教育であ

5) 2005年8月5日、筆者はN村主任の紹介で始めてこの夫妻と出会い、この話を聞いた。

6) 2005年12月28日、Cさんの自宅でこの話を聞いた。

る [庄 2001: 277-281]。上述した帰国華僑の経済生活は、彼らがこのような国家イデオロギーの中に組み込まれていったことの一面を反映している。

更に、文化大革命（以下文革と表記）以降、インドネシア帰国華僑は悲惨な状況に追い込まれていった。W村のある50代前半の婦人は当時を振り返り、次のように話してくれた。

文革の時は毎日やりきれない気持ちでした。毎晩集会があつて、明け方4時まで続くこともあり、睡眠不足のまま次の日また労働に行かなくてはなりません。話をする時にはとても気を使いました。インドネシアでは女性は家事と子育てをすればよかったなどと口にするものなら、「走資派」のレッテルを貼られ夜の会議で批判や拷問を受けました。あるインドネシア帰国華僑の男性は、みんなの前で「私はインドネシアにいた頃一人で家族を養っていた。一人の給料でたくさんの卵を買うことができた」と言ったばかりに、拷問に遭いました。彼は文革が終わると再びどこかへ移民してしまつたらしいです⁷⁾。

これらの語りから、インドネシアと社会主義中国との間におけるギャップを感じながらもそれも口に出せない心の苦悩が窺える。

このようなイデオロギーの注入と本音との間で葛藤する姿も見られる。例えば、上で紹介したK氏とCさん夫妻は、筆者の「中国に戻ってきたことを後悔していませんか？」という問いに対して「私たちは国を愛し、心は紅い。だから5人の息子のうち3人も兵士として送り出しました。でもインドネシアが恋しくて帰りたいとも思います」と答えた。「国を愛する」や「心が紅い」といった表現は当時の中国のイデオロギーを反映している。その一方で、インドネシアを恋しく思う姿といった矛盾した気持ちが見られる。

以上から、インドネシア帰国華僑というアイデンティティの形成にかかわる2つの要因を指摘できる。1つは、農場に最初にやってきて開墾作業に携わってきたという共通の経験と記憶を共有していることである。もう1つは、1960年代、70年代までの社会主義改造という政治環境の影響である。これは帰国華僑の間で中国伝統文化（祖先崇拜や清明節などの年中行事）に対する態度の相違が見られることとも関わっている。

以下では、ベトナム帰国華僑との比較を中心に、他のグループとの接触を通して見られる日常生活における生活習慣と中国伝統文化に対する態度の違いの角度から、インドネシア帰国華僑という意識の芽生えについて考察したい。

7) 筆者はしばしばW村のレストラン「僑郷園」（2006年9月閉店）の前に住み、毎日家の前に椅子を並べて座っていた数人の老婦人と話をしていたが、この婦人はそのうち1人の娘で、彼女ともよく家の前で話をした。この話は2005年7月初めに聞いた。

(3) 生活習慣、中国伝統文化に対する態度の違い

生活習慣の面から見ると、インドネシア帰国華僑は花や植物を植えるのが好きで、家の前に小さな花壇を作り、そこはいつも緑で溢れている。きれい好きで、家の中の床はいつもピカピカに磨かれている。そして家の周りの衛生にも気を配り、掃き掃除を欠かさず、物も決められた場所に整然と置かれている。近所の人や友人が尋ねてくると、靴を脱いで家の中に入るのが普通であるが、インドネシア帰国華僑は人を家の中にむやみに入れたがらない。一方、ベトナム帰国華僑の家の前には花や植物が植えられているのをほとんど目にしない。家の前には鶏やガチョウを放し飼いにしていたり、ゴミを散らかしたり、掃除用具が雑然と置かれていたりする状態である。部屋の掃除はするものの、インドネシア帰国華僑ほど丁寧に床を磨くことはなく、他の人が来ると、土足のまま家に上がることもしばしばである。さらに、インドネシア帰国華僑は門を閉めていることが多く、私的な空間を維持したがる傾向にあるが、ベトナム帰国華僑は誰か家に居る時はいつも門を開けており、親しい友人はノックもせず勝手に入って、マージャンをしたり、お茶やお酒を飲んだりしながら世間話をするのが好きである。

食生活について見てみると、インドネシア帰国華僑は香辛料を自分で栽培し、しばしば日常の食卓においてインドネシアの香辛料を使用した料理が見られる。特にココナッツ風味のカレーはしばしば作られ、春節や中秋節といった年中行事の時にも作られる。ベトナム帰国華僑は、日常の食事においては広東人と同様の材料や調味料を使い、広東人が日常的によく作るスープや、蒸し魚、鶏やガチョウなどを食べている。しかし、春節など特別な日にはベトナム風春巻き、大きな筒型の粽など独特の料理を見ることができる。

次に中国伝統文化に対する態度、ここでは祖先崇拝と葬儀、清明節の執り行い方の相違について見てみると、ベトナム帰国華僑は祖先崇拝を重視しており、ほとんどの家に先祖を祭る神棚がある。毎月旧暦の1日と15日に線香を上げる。春節、清明節、端午節、鬼節、冬至の時には「迓福」と呼ばれる祖先崇拝の儀式を行う。清明節の時には、豚を焼き、鶏やガチョウを殺し茹でて、墓参りの時にもって行く。他にもパンケーキや果物、爆竹なども用意する。一方、インドネシア帰国華僑の場合、家に先祖を祭る神棚がある家が少なく、清明節の墓参りも簡単に済ませる人、あるいは外地から親戚が来ない限り墓参りにさえ行かないという人も見られる。爆竹を鳴らすのも好きではない。葬儀の時、インドネシア帰国華僑の中には遺灰を海に撒く人も見られる。これを見たベトナム帰国華僑は「苦勞して子どもを育ててきたのに最後に子どもに遺灰を海に撒かれてかわいそうだ。親不孝な行為だ」という人もいる。

このような相違が見られる理由の1つに、上述した文革経験の有無が考えられる。インドネシア帰国華僑は社会主義的思想改造の一貫である迷信や封建的習慣の廃止といった影響を強く受けているのに対し、ベトナム帰国華僑はその影響をほとんど受けていない。

以上のように、日常生活における習慣の差異もまた、人々の間に境界を作り、グループ意識を芽生えさせる要因になっていると考えられる⁸⁾。

(4) 主導的集団としてのインドネシア帰国華僑

農場に最初にやってきて開墾作業に携わってきたという事実は、インドネシア帰国華僑の農場における政治的経済的地位を高めることとなった。以下では、農場の政治的経済的体制とインドネシア帰国華僑が主導的グループであることを指摘していく。

農場の行政管理はS管理区にある農場本部が行っている。その下は各村民委員会がそれぞれの村の行政管理をしている。農場本部は5人の核心幹部と6つの弁公室（党政弁公室、財務弁公室、社会事務および綜合治理弁公室、農林水弁公室、統僑弁公室、郷村建設弁公室）、6つのセンター（經濟管理センター、文化センター、牧畜センター、農機管理センター、農林技術推進センター、招商センター）から成る。5人の核心幹部は共産党書記1人、農場長1人、副農場長3人から成り、1人の副農場長を除き残りは非帰国華僑である。この副農場長はインドネシア帰国華僑V氏で、5人の核心幹部の中でも在任期間が最も長い。他の書記や農場長は外部から任期付きで派遣されてきた暫定的な人であるため、住民からはV氏が実質的な一番の権力者として見られている。彼は農場内では財務に関する仕事の責任者である。そして農場内だけでなく、江門市僑務弁公室や広東省上級管理機關僑務弁公室などの政府機関とも通じている。また時には広州にあるインドネシア領事館が主催する活動にも華僑農場を代表して参加している。従って、華僑農場内部ではもちろんのこと、華僑農場と外部の重要な政府機関とのパイプ役としても重要な人物であるといえる。その他の農場本部の弁公室とセンターの幹部構成及び本部で働いている職員（電気工、運転手など）の内訳を見ると、計50人中、インドネシア帰国華僑が13人（子女を含む）、ベトナム帰国華僑3人、その他は他の国からの帰国華僑と「本地人」である⁹⁾。行政管理に携わっている幹部構成の状況からいうと、政治的実権はインドネシア帰国華僑が握っているといえる。

インドネシア帰国華僑が政治組織において中心的な役職を占めていることは、農場内の職業構成と家庭の経済状況にも影響を与えている。例えば次のようなエピソードを耳にした。あるW村に住むインドネシア帰国華僑の女性はサトウキビ生産に従事していたが、数年前、突然砂糖工場の経理の仕事に任されるようになった。彼女の夫のお兄さんはW村民委員会の主任で、彼と副農場長のV氏とは友人である。この関係によって良い仕事の機会を得たというわけである。これまで彼女とともにサトウキビを栽培していたベトナム帰国華僑の女性たちは相

8) 日常生活におけるインドネシア帰国華僑とベトナム帰国華僑の関係について、本稿では目に見える習慣の差異の記述に留まった。心理的衝突にも至る詳細な記述は、奈倉 [2007: 17-43] を参照されたい。

9) 情報は2005年10月7日、V氏への聞き取りによる。

当な不満を抱いている¹⁰⁾。

農場において比較的収入の高い職業は、幹部、教師、砂糖工場で働く人である。表4に示した通り、それらの職業に就く（就いていた）インドネシア帰国華僑の割合はベトナム帰国華僑よりも高い。また、インドネシア帰国華僑の女性の中には託児所で働いている者（働いていた者）が比較的多い。これは、彼女たちが退職年齢に近づくと農場本部の幹部の計らいで体力的に楽な仕事を与えられていることによる。さらに、後述するように、改革開放以降、インドネシア帰国華僑の中には農場から出て、他の都市で収入の良い仕事に就いた者と外で働く者から仕送りを得ている家族も見られ、それらを総合的に考慮すると、インドネシア帰国華僑家庭の経済状況は相対的に良好で安定しているといえることができる。またV氏を始め、その他のインドネシア帰国華僑の幹部は第三世代のインドネシア帰国華僑子女の就職にも気を配っている。このようにインドネシア帰国華僑の政治的権力の優越性が職業の分配に反映されている。関係が関係を生み、全体としてインドネシア帰国華僑に有利な経済環境を作り出しているのである。

表4 職業情況（退職した場合も含む）

職業	V男性(人)	V女性(人)	V比率	I男性(人)	I女性(人)	I比率
サトウキビ生産	10	16	40.63%	3	4	15.91%
技術関係(電気工など)	5	1	9.38%	3	2	11.36%
砂糖工場	6	2	12.50%	5	2	15.91%
教師(託児所、小中学校)	3	3	9.38%	0	7	15.91%
幹部	2	0	3.13%	6	1	15.91%
自営業	0	3	4.69%	3	1	9.09%
外地へ出稼ぎ	1	1	3.13%	1	1	4.55%
無職	1	4	7.81%	0	2	4.55%
その他	3	3	9.38%	1	2	6.82%
合計	31	33	100.00%	22	22	100.00%

出典：筆者の世帯調査による。調査対象は1940 - 1960年代生まれのベトナム帰国華僑64人とインドネシア帰国華僑44人である。W村の情報は女性主任、農場建設当初から居住している農場本部幹部（インドネシア帰国華僑、男性、40代後半）からの聞き取りおよび、一部は『1999年常住戸口冊』（台山市公安局、内部資料）による。N村の情報は直接本人からの聞き取り、N村主任と主任夫人による。この年代を調査対象者としたのは、1940年生まれ以前のベトナム帰国華僑は1977,78年に帰国してから退職までの勤務年数が短いに対し、インドネシア帰国華僑は1960,61年に既に帰国しており勤務年数が長いため比較にならないためである。

（注1）Vはベトナム帰国華僑、Iはインドネシア帰国華僑を表す。

（注2）「V比率」はベトナム帰国華僑合計64人に対する比率を、「I比率」はインドネシア帰国華僑合計44人に対する比率を表す。

II 外部に向けて発するインドネシア帰国華僑というアイデンティティとその醸成

以上の考察を通して、農場におけるインドネシア帰国華僑の政治的経済的地位は、複数のグループの中で相対的に高いことがわかった。そして、共通の経験や記憶、他の集団との日常的接触を通して、言語や生活習慣などの差異を自覚していくことによって、内側からインドネシ

10) この情報は2006年春節前後にW村の女性主任（主に計画出産に関する仕事を担当している）やN村主任の夫人など数人から聞いた。

ア帰国華僑としての意識が芽生えていったといえる。

では、そのインドネシア帰国華僑という意識がどのように醸成されていくのだろうか。以下では、農場外部との交流を通して外部に向けて発せられるインドネシア帰国華僑の特徴と、外部の機関や人々との相互関係を通して外側から醸成されていくインドネシア帰国華僑意識について考察していく。

1 「インドネシア帰国華僑家庭展覧室」¹¹⁾

2002年5月、農場における観光開発がスタートした。まず「風情園」という東南アジアの踊りや歌、楽器演奏などを披露するパフォーマンス場を建設し、観光客やメディア関係者、外部の政治幹部が訪れるときに公演を行うことにした。しかし、それだけでは帰国華僑の生活の様子や特徴を理解してもらうには不十分であった。このような状況を見て、農場W村のR家の兄弟は両親が生前住んでいた家屋を改築して、「インドネシア帰国華僑家庭展覧室」を創設することを提案した。R家の兄弟は3男2女から成るが、三男R3氏が最初にこの提案をした。彼は広州僑務弁公室に勤めており、農場本部の幹部との関係も良好である。次男のR2氏も農場本部の幹部の1人で、財務弁公室に勤めているため、彼らが展覧室の構想を農場の有力なインドネシア幹部であるV氏に持ちかけると、すぐに許可された。R家の兄弟5人は協力して出資し、合計約1万円を投資して展覧室を創設した。現在は、農場本部から毎月300円の支援金ももらっている。主な展示品は、亡き父R氏と母C女史がインドネシアで使用していた生活用品や生活の様子を撮った写真、また帰国後の生活の様子を撮った写真などである。父R氏は生前、写真が趣味で、インドネシアに住んでいた頃、中華学校で教鞭を取る傍ら、自宅で写真館を開いていた。従って、多くの写真が残されている。これは同世代の人々の中では珍しく、それらの写真は貴重な資料である。そして亡き母C女史はインドネシア時代、非常に裕福な家庭で育った。オランダ人が経営するミッション系の小学校に通い、両親からは欧米製の刺繍道具やミシンなどを買い与えられていた。それらも展示品として置かれている。

展覧室は4部門から成る。第一室は写真室で、インドネシアのウォノソボ(Wonosobo)という町に住んでいた頃の写真と、帰国後1960年代から70年代の生活の様子を撮った写真が展示されている。それから、R家の簡単な族譜と日本がインドネシアを統治していた時代に外国人居留者を対象に発行していた「良民証」(1943年発行)も展示されている。第二室は父R氏に関する記念品を集めた部屋で、インドネシア中華学校で教鞭を取っていた頃、学校で撮った写真や、証明書、教科書そして生活用品などが展示されている。第三室は、母C女史に関す

11) 筆者は2005年3月からL家の次男R2氏と三男R3氏と広州や農場で交流を重ねてきた。特に、2005年6月から8月末までR2氏のご自宅で朝昼晩の食事をいただいていた。このように日常的交流を通して展覧室創設の過程と現状に関する情報を得た。

る記念品を集めた部屋で、刺繍品やドイツ製ミシン、オランダ学校の卒業証明書（1938年発行）などが展示されている。これらの展示物からC女史がインドネシアで裕福な生活を送っていたこと、そして帰国後の生活との格差が窺える。第四室は、飲食文化室で、インドネシアの家庭料理の写真や、帰国後、計画経済の下で使用されていた食料配給切符が展示されている。これらの展示品から、R家のインドネシア滞在中の生活と帰国後の生活の一部、及びその格差を垣間見ることができる。

「インドネシア帰国華僑家庭展覧室」は、地元紙『江門日報』や『広州僑商報』、そしてウェブサイトで取り上げられている。また地元の江門市僑務弁公室や広州僑務弁公室などの行政機関は、この「インドネシア帰国華僑家庭展覧室」を高く評価している。それから、2005年農場W村が「全国文明村」に認定された1つの理由としても挙げられた〔広東省人民政府僑務弁公室2002:7-8;『広州僑商報』2005年11月30日、第一版〕。このようにして、農場にやってくる観光客などに対してだけでなく、インドネシア帰国華僑を農場の中心的グループとする印象を外部にも植え付けていったのである。

しかし、一方で、R家の人々が展覧室を維持させるために、政府とうまく折り合いをつけている点も見られる。現在、兄弟の中で次男R2氏が1人だけ農場で生活を続けており、展覧室を管理しているが、彼によると、当初第一室のインドネシア時代の写真と帰国後の写真を並べて展示していた。しかし、中国僑聯会の幹部が参観に訪れた時、このように展示しては人々にインドネシア時代が裕福で帰国してから貧しくなったという印象を与えるのではないかと指摘された。R2氏は慌てて「いいえ、やはり社会主義の国の方がいいと思います」と答え、それ以来、インドネシア時代の写真の位置を変え、政府の贖贖をかわないように気をつけているという。それから、第一室の始めに「帰国後の生活」と題した紹介文が貼られているが、そこには「帰国華僑は祖国に帰国後、党や政府の親身な心遣いをいただいた」、「政府は住居、就職から医療、子女の教育などにいたる保障の面で、1960年代の困難な時期にもかかわらず、我々帰国華僑の最低限の生活を保障してくださった」といった文が見られる。これらから、政府の反応を気にしていることがわかる。R2氏は更に「このようにしなければたぶん政府から展覧室創設の許可が下りないでしょう」と筆者に語った。

以上見てきたように、「インドネシア帰国華僑家庭展覧室」は政府と衝突しないように考慮しつつ良好な関係を保ち、政府の支持を得ながらインドネシア時代の日常品、生活の様子を表わす写真といったインドネシア帰国華僑の特徴を表わす物を保持している。そして、この展覧室は実質的にはインドネシア帰国華僑の農場というイメージを与えるものとしても機能している。現在、観光客や幹部が訪れると、まずこの展覧室を参観し、それから「風情園」で公演を見するというパターンが定着している。これは当然農場にはベトナム帰国華僑などのグループも共存しているにもかかわらず、外部にインドネシア帰国華僑中心の農場、あるいは帰国華僑＝

インドネシア帰国華僑という印象を与えることになる。

2 「風情園」の活動

次に、農場の観光のメインである「風情園」とインドネシア帰国華僑との関わりについて紹介したい。ここで強調したいのは、「風情園」は農場内部の活動は基より、その外部との関係を築くためのパイプ役的機能を果たしているという点である。

「風情園」は2002年5月に開園した。歌や踊りを披露しているのは農場に住む16歳から30歳前後の若者で、帰国華僑の子女に限らず、臨時労働者の子女もいる。彼らの学歴は低く、最高でも中学卒業程度で中には小学校も卒業していない者もいる。給料は農場本部から支払われ、勤務年数や経験によって差があるが、月300元から700元程度である。農場の人々の彼らに対する評価はとても低い。「時間を浪費しているだけで、何の技術も身につかない」、「外で働き口がないから仕方なくここに残っているだけだ」といった声がしばしば聞かれる。「風情園」のメンバーの入れ替わりも日常茶飯事で、辞めたり戻ってきたりを繰り返す者もいる。彼らは学校などで専門的に歌や踊りを勉強した経験がなく、農場の帰国華僑の老人に習ったり、DVD教材を見ながら独学したりといった状況で、専門性は低い。

しかし、農場本部の幹部は「風情園」のメンバーの専門技術の養成を非常に重視している。例えば、2005年8月から9月にかけて、インドネシア大使館を通してインドネシアから2人の女性の舞踊専門家を招き、技術指導を依頼した。この期間にメンバーは専門性の高い新しいインドネシアの踊りをマスターすることができた。更に同時期に、約1ヶ月間インドネシア語教室を開いた。農場の小学3年生以上が無料で参加することができたが、「風情園」のメンバーに簡単なインドネシア語を修得させることが真の目的であった。参加者は30人で「風情園」のメンバーが半分を占め、残りは農場の小学生、中学生と夏休みで帰省していた大学生であった。教師は農場の小学校の校長で、インドネシア帰国華僑であるG教師と、元広州暨南大学教授でインドネシア帰国華僑のK教師が担当した。

メンバーの学習態度は踊りにせよインドネシア語にせよ、消極的であった。中にはインドネシア帰国華僑の子女で祖父母などと会話する機会があるため積極的に勉強していた者もいたが、他のメンバーはインドネシアとは何の縁もなく、もともと勉強する習慣もないため憂鬱そうに授業を受けていた。

ではなぜ農場の幹部は彼らの技術養成を重視するのだろうか。その主な原因は農場の観光業を発展させることの他に、外部との交流に際してメリットがあるからである。例えば、広州のインドネシア領事館で開催されるイベントにおいて、インドネシアの踊りや歌を披露したいとき、インドネシアから専門のパフォーマーを呼ぶのは費用がかかる。そこでインドネシア領事館は広東省の華僑農場と連携して、舞踊を依頼することが多い。広東省内の他の農場にも「風

情園」のようなパフォーマンス場があり、そこで舞踊を披露する者もいるが、その多くは中高年層で、若者が少ない。本農場では若者のメンバーが多いことから彼らの技術養成を重視し、農場を代表してインドネシア領事館の活動に多く参加させ、インドネシア帰国華僑やインドネシア人と交流を深めることを目的としているのである。つまり、「風情園」を「外交」のために利用し、農場内部と外部のインドネシア帰国華僑やインドネシア人とを結びつけるパイプ役として機能しているのである。

一方、「風情園」は農場で政治的権力をもつインドネシア帰国華僑幹部の個人的な活動や接待の目的で利用されることもある。例えば、先に紹介した副農場長のV氏は、2005年8月13日、母校広州会計学校の同窓会を農場で開催し、夜「風情園」のメンバーに公演させた。

以上の事例から2つのことがいえる。1つは、農場は「風情園」を外部のインドネシア帰国華僑やインドネシア人と交流を深めるためのパイプ役的存在として利用していること。もう1つは、それによって、農場内部にも外部にもインドネシア帰国華僑の存在を強調し、集団としての特徴を生産し続けていることである。こうして、インドネシア帰国華僑としての集団意識を内側からも外側からも醸成させるとともに、インドネシア国家やインドネシアの人々とも接触することによって交流の範囲を広げているのである。

3 テレビ放送を通して

最後にもう1つ、外部にインドネシア帰国華僑中心のイメージを植えつける事例を紹介したい。

2005年9月末に広東テレビ局が農場の撮影にやってきた。番組名は「和諧家園」（仲睦まじい、調和の取れた家族）である。この時、インタビューを受けたのはたった一人のベトナム帰国華僑幹部を除いて、すべてインドネシア帰国華僑だった。筆者も農場を研究している留学生としてインタビューを受けたが、放送ではインドネシア帰国華僑に関する部分のみが採用され、ベトナム帰国華僑や「臨工」など他の人々に関する内容はカットされていた。この番組制作に当たって、副農場長であるインドネシア帰国華僑幹部のV氏がディレクターと連絡を取り合い、撮影の時も随時付き添い、農場の紹介や撮影場所やインタビューする者の選択も行っていたことがインドネシア中心の番組構成となったことと関係がある。

この番組は、「和諧家園」と題した一枚のDVDに製作され、農場幹部や外部の農場にも配られた。筆者はこの「和諧家園」の番組を見た何人かに感想を聞いてまわった。村民委員会幹部と農場本部幹部の意見は「インドネシア帰国華僑はしばしば国内で同窓会を開くので、彼らの農場への投資を促すためにインドネシア帰国華僑を中心に紹介した。それに彼らの文化はベトナム帰国華僑よりも独特だから」、「このビデオは僑務会議の時に宣伝として使うため、外に向けて農場の家屋改革の成功をアピールできる」といったものだった。一方、幹部ではない

人々に感想を聞くと、あるベトナム帰国華僑（N村、女性、40代後半）は「まるで私たちベトナム帰国華僑は存在しないのと同じだ」と不満そうに語っていた。

このようなメディアを通じた宣伝は、外部に向けてインドネシア帰国華僑中心のイメージを創造する。農場内部の人々の視点から見ると、インドネシア帰国華僑を強調することは、彼らの優越感と集団意識を高めることにつながるが、インドネシア帰国華僑以外の人々にとっては、集団間の差異を自覚させられる。

以上見てきた3つの事例から、インドネシア帰国華僑は外部との交流を通して政府と衝突しないようにうまくコミュニケーションを取りながら良好な関係を築くことで、中国という国家の中でも自分たちの居場所を見出し、存在をアピールすることに成功してきたといえる。

III 「中国系インドネシア系移民」へ

インドネシア帰国華僑はインドネシアと中国の双方に縁をもつ集団である。彼らは国内においてはインドネシア帰国華僑を準拠集団としながら、今もなおインドネシアに居住するインドネシア華人や、インドネシアから第三国に再移民した人々とも交流の場をもっている。以下では、その交流の場となる集いの具体的事例を紹介し、「中国系インドネシア系移民」という新たな集団意識が形成されていくプロセスについて考察していきたい。

インドネシア帰国華僑が帰国してから40年余りが経過したが、その間、国内国外において人間関係のネットワークを少しずつ広げてきた。まず、1980年代後半以降、海外華僑華人が中国大陆に投資をし始め、工場や会社の建設を始めた。その時、広東省僑務弁公室は省内の華僑農場の帰国華僑を優先的に雇うことを提唱した。こうして一部のインドネシア帰国華僑は深圳や広州といった大都市で就職する機会を得た。彼らは経済発展の機会を得るとともに、都市で新たに人間関係を築き、別の仕事の機会も得ることができた。そして農場に残してきた家族や親戚にも仕事を紹介し、彼らもまた都市へ出て行くことが可能になった。それから、農場のインドネシア帰国華僑の中には1970年代後半から高校に通って教育を受けられる機会を得た者もいた。彼らの中には農場で幹部の職に就く者や外地の企業に就職する者もいた。

インドネシア帰国華僑の経済状況が良好になったもう1つの理由に、海外との関係がある。インドネシア帰国華僑の家族や親戚の中には1960年代に帰国せず、インドネシアに残った者もいる。改革開放以降、インドネシアに残っている家族との連絡が復活し、中国政府は親戚訪問を許可し始めた。この時、香港を経由してインドネシアへ入国するという方法が採られたが、一部のインドネシア帰国華僑は香港に入国するとそのまま滞在し続け働き始めた。中には自分で小さな商売を始める者もいた。当時、香港は7年間居住した者には永住権を与えていた。その後、香港永住権を得た者の農場に残された家族の中には遺産相続を理由に香港へ行く者も現

われた¹²⁾。

この聞き取りによって得られた香港移民に関する事実の真偽を検証するために、1970年代から80年代における香港移民政策に関する資料を調べてみた。1974年、香港政府は中国大陸からの移民が香港に留まることを禁止し、“the reached-base policy”と呼ばれる政策を施行し始めた。この政策によると、香港に不法侵入した者は捕えられ、中国大陸に返送されるが、捕えられなかった者、また香港で既に家庭がある者、あるいは固定した住居がある者は香港に留まることを許可された。この規定は1980年10月23日に廃止され、これ以降、中国大陸から不法侵入したすべての者が送還されることになった[Lam and Wai 1998: 13-17]。この事実から、1980年以前に農場から香港に入ったインドネシア帰国華僑はそのまま香港に留まる可能性が確かに存在していたことがわかる。

このように、インドネシア帰国華僑は農場の外部でも着々と経済基盤を作り、自分たちで資金を出し合って同窓会などを開催する経済力を持つようになった。

広東省や福建省の各県を中心に存在する「インドネシア帰国華僑聯誼会」もまたインドネシア帰国華僑を凝集させる機能を備えている。帰国華僑聯誼会について以前、福建省僑務聯合会の会長で、福建社会科学院の院長も務められていたY氏にお話を伺った。Y氏はインドネシア帰国華僑とベトナム帰国華僑が帰国した時、広西省や雲南省へ迎えに行き、お世話をした経験ももつ。Y氏によると、帰国華僑聯誼会は現在インドネシアに限らずタイ、ミャンマー、フィリピン、ベトナムなどの帰国華僑聯誼会も多く見られるが、インドネシア帰国華僑の規模が最も大きく活動も多い。それは、インドネシア帰国華僑は人数が多いことに加え、帰国する時にインドネシアの様々な地方から集められ一隻の船に乗せられて帰国したため、帰国後新しい結びつきを求める傾向が強かったことが1つの理由として挙げられる。人数の多いベトナム帰国華僑と比べてみると、彼らは帰国する際にいつも生活をともにしていた同じ場所の人々と一緒に帰国したために人間関係や内部の管理体制がそのまま残されおり新たな結びつきを必要としなかった¹³⁾。

以下では、インドネシア帰国華僑の間の結びつきを強める活動や、インドネシア帰国華僑を中核としてインドネシアと中国の双方に縁を持つ人をも吸収した集いについて紹介していきたい。

12) これらインドネシア帰国華僑の深圳や広州へ就職する情報や香港移民に関する情報は2005年10月2日、副農場長でインドネシア帰国華僑のV氏から得た。

13) 2007年9月26日、福建省廈門市にあるY氏の自宅にて。

1 インドネシア帰国華僑の内部から起こった民間レベルの活動

(1) インドネシアバンカ (Bangka) 中華学校同窓会¹⁴⁾

2002年10月19日、深圳にある中旅大学において「第一回インドネシアバンカ中華小中学校同窓会」が開催され、400人近い同窓生が参加した。香港でビジネスに成功したT氏（インドネシア帰国華僑）が開催費用として100万円を寄付した。参加者は1人60円の参加費を払った。2004年11月20日、第二回目のインドネシアバンカ中華小中学校同窓会が深圳民俗村で開催され、第一回目を超える約700人が参加した。興味深いのは、参加者を見てみると、国内のインドネシア帰国華僑以外に、インドネシアや、香港からの参加者および、中国やインドネシアからオーストラリア、カナダなどの第三国に移民した人々も見られることである。

二回の同窓会の様子はDVDに収められ、参加者全員に記念品として配られた。筆者はそのDVDを見せてもらった。40年の月日を経て久しぶりに再会し、抱き合って喜ぶ者や、涙を流す者、一緒に写真を撮る者の様子が見られた。またこの同窓会は舞台上で司会者が進行を務め、同窓生が個人やグループで踊りや歌などの出し物を披露し、他の同窓生は舞台下でそれらを見て楽しむという形を取っていたが、そこではインドネシアの歌や舞踊、楽器演奏が披露された。この同窓会の日のために同じ地域に住む者同士が連絡を取り合い、練習を重ねたそうである。

(2) インドネシアジャカルタ中華高等学校交歓会¹⁵⁾

2005年11月11日から13日にかけて、広州にある夢岡幹部療養院において、インドネシアジャカルタ中華高等学校第60期卒業生交歓会が行われた。参加者は北京、マカオ、香港、インドネシア、オーストラリアなど22カ国から訪れた。開催経費として経済状況の比較的良好な同窓生から7万円が集められた。かつて2003年にインドネシアでもジャカルタ中華高等学校第60期卒業生交歓会が行われたが、特に何年に一度開催するというふうには決められておらず、同窓生の経済状況によって決められる。

筆者は12日の活動に参加させてもらったが、そこでは歌や踊りの出し物や抽選会などが行われた。この交歓会の運営委員の1人にかつて台山海宴華僑農場で生活していたR氏（60代男性、インドネシア「学生帰国華僑」）がいた。R氏は1980年に広州に移り住んでからも、インドネシア語通訳の仕事をする傍ら、農場観光課の仕事にも協力し、インドネシア帰国華僑による活動が広州で行われる時には農場観光課と連携して、「風情園」のメンバーを呼んで公演の機会を与えている。今回の交歓会にも農場の「風情園」のメンバーが呼ばれ、同窓生の出し

14) この同窓会に関する情報は、同窓会に参加した農場QS村に住むインドネシア帰国華僑（50代男性）とその兄弟による、2005年7月5日。

15) 本節の情報は、筆者が2005年11月12日にこの交歓会に参加した際、運営委員の1人にかつて台山海宴華僑農場で生活していたR氏（60代男性、インドネシア「学生帰国華僑」）から得たものである。

物の間に何度かインドネシアや東南アジアの踊りやインドネシア語の歌、インドネシアの伝統的な楽器演奏を披露し、雰囲気盛り上げていた。

(3) その他の集い

インドネシアの地域別同窓会や集いは他にも見られる。例えば、広州の暨南大学元教授の黄慧氏と林涛氏が中心となって活動している「インドネシアシンカワン (Singkawang) 地区中華学校同窓会」などが挙げられる。シンカワンはカリマンタン島西部に位置し、ここから帰国したインドネシア帰国華僑は客家語を話す人が多い。同窓会以外にも、インドネシア居住地域別の小規模な集いも見られる。例えば2005年8月、農場のS管理区において「サンパウロ茶話会」が開かれた。これはかつてインドネシアサンパウロから帰国し、農場に住んでいた数人の者たちが広州から農場を訪れた際に開かれたささやかな集まりであった。これらの事例からインドネシア帰国華僑がインドネシアの同じ地域から戻ってきた者の間に同胞意識をもっていることがわかる。

これらの活動から、帰国華僑というアイデンティティを中核としているのではなく、同郷の人、同窓生という結び付きと愛着をインドネシアに求めていることがわかる。

2 政府と提携して行われる活動

インドネシア帰国華僑聯誼会による集い

1978年以降、帰国華僑聯合会やその他が徐々に復活し始め、中でも僑郷であり、帰国華僑が集中している広東と福建には、研究所や高等教育機関、工場、町内などに相次いで設立された [黄 2005: 314-316]。インドネシア帰国華僑聯誼会もこの潮流の中、設立された組織の1つである。

2005年9月16日午後5時から9時45分くらいにかけて、江門市インドネシア帰国華僑聯誼会の主催によって、江門順酒店において「江門市インドネシア帰国華僑聯誼会中秋節祝賀会」が開かれた。当日配布された江門市インドネシア帰国華僑聯誼会に関する資料によると、この組織は、1987年に成立し、現在200人あまりの江門市居住のインドネシア帰国華僑から成る。主な活動は中国の大きな伝統年中行事である春節、中秋節の時に親睦会を開くこと、高齢者や病弱者、身体障害を持つインドネシア帰国華僑の支援をすること、帰国華僑子女に奨学金を支給することなどである。春節、中秋節の親睦会は、経済状況によって年に2回開催されることもあれば、1回の時もある。インドネシア帰国華僑の参加者の様子を見ると、同窓会のように久しぶりの再会を楽しんでいるというよりは、いつもの親しいメンバーに会って同じテーブルに坐って会話を楽しむといった、親戚の集まりのような雰囲気を感じた。

今回の祝賀会の主な参加団体は、江門市外事僑務局、中山インドネシア帰国華僑聯誼会、珠

海インドネシア帰国華僑聯誼会、台山海宴華僑農場、崗美華僑農場である。つまり、江門市の周辺にある華僑農場や帰国華僑聯誼会と連携して行われた。江門市周辺の帰国華僑関連の組織以外にも、広州にあるインドネシア領事館の総領事代理（インドネシア人）、香港インドネシア帰国華僑、マカオインドネシア帰国華僑、江門市外事僑務局、広州で中国語を勉強しているインドネシア華裔の留学生などの出席者も見られた。当日筆者が知り合ったインドネシア華裔の留学生、Z君の両親は広東省梅州出身で、現在インドネシアで生活している。彼の国籍もインドネシアである。彼は両親の希望通り、インドネシア中華学校高等部を卒業後、中国広州にある暨南大学へ中国語を勉強しにきた。「今は中国の経済の方がインドネシアよりも発達しているので、勉強を終えたらこのまま中国に残って就職したい」と語っていた。

農場の副農場長でインドネシア帰国華僑であるV氏は、このような集いに参加することによって、農場に投資してくれる人が現れることを期待しているという。農場の発展を外に向けてアピールすることができるからである。これはまた、IIの「外部に向けて発するインドネシア帰国華僑」とも連動してくるであろう。

この活動を通していくつか興味深い点が見えてくる。まず、参加者からいえるのは、江門、台山、中山、珠海などの地域を越えたインドネシア帰国華僑の結び付きが見られることである。中国、香港、澳門、インドネシアといった複数の地域のインドネシア帰国華僑が手を結ぶことによって、地域を超越したインドネシア帰国華僑のアイデンティティが共有されていくのである。更に興味深いのは、インドネシア人やインドネシア華裔の参加といった、インドネシアと中国とを跨ぐ関係も見られることである。

次に、民間機関である帰国華僑聯誼会主催の活動に、インドネシア領事館や江門市外事僑務局といった政府機関の人たちも参加していることである。これは政府にとってもインドネシア帰国華僑にとっても双方に利益があると思われる。インドネシア帰国華僑の視点から見ると、政府機関の支持を得ることによって公の場で開催される正式な活動という性質を帯びるようになり、インドネシア帰国華僑の存在が認められ、結び付きがより強固になるという効果が期待できる。Iの部分で述べたように、文革の時期にはインドネシア帰国華僑としての自己を押し殺さなければならなかった。帰国華僑聯誼会の活動は、彼らの心に閉じ込められてきたインドネシアから戻ってきたという意識を再び呼び起こしているとも見ることはできるのではないだろうか。

一方、政府の側から見ると、インドネシア帰国華僑と連携することを通して、インドネシア政府と友好関係を結ぶ可能性が生まれる。別の角度から見ると、政府の働きかけもまた地域を越えたインドネシア帰国華僑の結び付きを促進しているということもできる。

3 政府主導で行われる活動

インドネシア華僑の根を求める活動

2005年7月から8月にかけて、広東省僑務弁公室の主催によって、インドネシア華僑青年を広東省に招き、彼らの両親の縁の地で根を求める活動が行われた。中国とインドネシア間の交通費は自費だが、国内でかかる費用はすべて無料とされた。参加者は21人（男性4人、女性17人）で、高校生、大学生から社会人も見られた。中国語（普通語）のレベルはまちまちで、基本的な会話ができる者もいれば、全くできない者もいた。

7月22日から24日まで、参加者たちは農場を訪れ、それぞれインドネシア帰国華僑の家庭にホームステイした。その間、農場の学生と交流会やバーベキュー大会が催され、夜は「風情園」で歓迎会が行われた。農場N村のインドネシア帰国華僑老夫婦の家にも、インドネシア華僑2人が滞在したが、その間「久しぶりにインドネシア語で子どもたちと話ができてとても楽しかった」と話していた。

彼らが「インドネシア帰国華僑家庭展覧室」を見学した後、室長のR2氏は筆者に「あの子どもたちは経済的にとても裕福だと思う。みんな日本製のデジカメやビデオカメラを持っていたよ」と感想を語った。筆者は学生との交流会の時に、ある大学三年生経済学部男子A君に両親のことについて話を聞いてみた。彼の両親は福建省出身で、現在はインドネシアで服飾の商売を営んでいるそうだ。彼によると、今回参加者の多くの両親が服飾、飲食、雑貨などの商売に従事しているという。最近また中国語学習が盛んになりつつあり、彼も大学の傍らプライベートスクールに通って勉強している。更に、以前日本語の学校にも通ったことがあり、簡単な挨拶程度の日本語も話すことができる。今回の参加者の中で彼以外にも2、3人が日本語を勉強した経験があった。このような青年たちの豊富な学習経験からも家庭の経済状況が比較的良好であることが窺える。A君は将来、大学を卒業したら北京か日本に留学したいと語っていた。

インドネシア華僑は、インドネシア華人とインドネシア帰国華僑との間を、そしてインドネシアと中国との間を繋ぐ架け橋としての役割を果たしているとともに、インドネシア帰国華僑もまたインドネシア華人と中国を繋ぐ架け橋として機能していると見ることができる。また、インドネシア帰国華僑がインドネシア華僑と交流する時、帰国華僑というよりも、インドネシアに住む（住んでいた）中国人という共通項によって結ばれ、同胞意識を感じるようになる。

この活動は、政府主導で行われたものである。先の2で紹介した事例と同様に、政府もまたインドネシア帰国華僑のトランスナショナル化を促進しているといえる。

以上III 1、III 2、III 3において取り上げた事例から見えてくるのは、インドネシア帰国華僑の重層的で且つ可塑的なアイデンティティの特徴である。

まず、同窓会やインドネシア地域別の集いでは、インドネシア帰国華僑というよりむしろか

つて住んでいたインドネシアの具体的な地域や学校に愛着を持ち、同朋意識を確認している。一方、インドネシア帰国華僑聯誼会中秋節祝賀会では、地域を越えた「インドネシア帰国華僑」というアイデンティティを中核としている。

次に、参加者から言えるのは、インドネシア帰国華僑以外に、インドネシア華人や華裔、それから以前インドネシアに住んでいたインドネシア華人が第三国に再移民した人の参加も見られるように、中国とインドネシアの双方に縁を持つ人々が交じり合っているのが見られる。インドネシア帰国華僑の立場に立ってみると、インドネシア華人や華裔、中国やインドネシアから第三国へ再移民していった人々との間の境界がしだいに曖昧になっている。そして、インドネシアと中国の双方に縁をもつ人々の交わりは、地域や国家を越えて拡大している。

この現象は、「中国系インドネシア系移民」とも呼びうる新たな社会的サークル形成のプロセスとして捉えることができる。即ち、中国とインドネシア双方に、あるいはどちらか一方に縁をもち、現在中国、インドネシアか、更には第三国に居住する人々によって共有されつつあるアイデンティティである。しかし、ここで見落とすことができないのは、先のⅢ2、Ⅲ3において述べたように、「中国系インドネシア系移民」の形成が完全に自発的に起きたわけではなく、政府の働きかけもまたインドネシア帰国華僑のトランスナショナル化を促進する要因となっていることである。

おわりに

本稿ではまず、インドネシア帰国華僑という集団意識がどのように芽生え、どのように醸成されてきたかということについて2つの方面から論じた。1つは、農場という特殊な文脈において、帰国した時期と共通の経験および他の集団との接触を通して沸いてきた優越感と、政治的経済的地位の高さによって、内側からインドネシア帰国華僑という意識が芽生えてきたことである。もう1つは、その集団意識は農場内部のみでなく、外部の政府や組織と良好な関係を築くことによって、外部に向けてもインドネシア帰国華僑の存在をアピールし、その存在が承認され始められ、外側からもインドネシア帰国華僑という集団を意識させるといった過程について考察した。

次に、インドネシア帰国華僑はそれを準拠集団としながら、同窓会やインドネシア帰国華僑聯誼会など諸々の集いを通して中国やインドネシア、更には第三国へ移民した者との間にも関係を築き、「中国系インドネシア系移民」とも呼べるアイデンティティへ拡大しつつある過程について考察した。インドネシア帰国華僑の自発性と政府が提携することによって、インドネシア帰国華僑はトランスナショナルな社会的ネットワークによって、可塑的に状況的かつ重層的に拡大しつつあるといえる。

インドネシア帰国華僑の形成過程及び「中国系インドネシア系移民」への拡大の過程において見落とすことができないのは、1960年代から70年代における社会主義中国のイデオロギーの影響及び、改革開放以降、帰国華僑の組織に対する政府の関与である。つまり、インドネシア帰国華僑のアイデンティティの形成と変容において、中国という国家の枠組みを完全に相対化することはできず、むしろ中国を拠点とし、インドネシア帰国華僑の民間から出た自発的組織と政府がうまく提携することによって維持されているといえる。

こうして見てみると、新たな社会的サークルの中核となっている「インドネシア」という要素は、複合的な「インドネシア」から成るといえるのではないだろうか。即ち、インドネシア時代の記憶としての「インドネシア」、帰国後の中国における新しい環境に適應する過程において、共にインドネシアから戻り、苦境を生き抜いてきた仲間の共通項としての「インドネシア」、そして「中国系インドネシア系移民」の形成を促す際の「インドネシア」は、地縁と血縁が混合した要素となっている。つまり、インドネシア帰国華僑は時間的にも空間的にも新しい「インドネシア」という要素を融合させながら発展しているのである。

以上の考察から、帰国華僑について考察する際、単にインドネシアから戻ってきてどのように中国社会に適應していくか、あるいはインドネシア時代の習慣を維持しているのかといった、中国対インドネシア、「落葉帰根」と「落地生根」といった二元論で考察するだけでは不十分であることが指摘できる。本稿では帰国華僑という行為者の角度から考察することによって、中国系移民の多様な変容形態に関する1つの事例を提示できたと考える。

謝辞

本論文のもとになった調査は、東京女子大学川上貞子奨学金によって可能になった。論文の構想にあたっては、中山大学人類学部の王建新先生と麻国慶先生からきわめて多くの示唆を得た。そして廈門大学南洋研究所の李国樑先生からは、インドネシア帰国華僑のアイデンティティ形成と国家イデオロギーの関係について助言をいただいた。また、神戸大学の貞好康志先生からは、「2007年度第3回華僑華人研究会」（2008年1月26日、東洋大学にて）の口頭発表の際、インドネシア帰国華僑にとっての「インドネシア」とは一体何なのか、という問題提起と貴重なコメントをいただき、アイデンティティの動態の考察に啓発を得た。さらに匿名の査読の先生方からは論旨に関することから日本語表記の問題まで非常に丁寧に読んでいただき多くのコメントをいただいた。以上、ここに記して謝意を示す。

参 考 文 献

〔日本語〕

スキナー, ウィリアム著

- 1981 『東南アジアの華僑社会——タイにおける進出・適応の歴史』(山本一訳), 東京: 東洋書店.

芹澤知広

- 1998 「文化とアイデンティティ——『香港人』・『香港文化』研究の現在」『岩波講座文化人類学第13巻 文化という課題』青木保他(編), 145-171 ページ, 東京: 岩波書店.

- 2002 『『香港人』と『越南難民』のあいだ』『拡大する中国世界と文化創造——アジア太平洋の底流』吉原和男・鈴木正崇(編), 169-189 ページ, 東京: 弘文堂.

奈倉京子

- 2007 「過渡的居場所としての『ベトナム帰国華僑』」『華僑華人研究』4: 17-43.

三尾裕子

- 2006 「中国系移民の僑居化と土着化——ベトナム・ホイアンの事例から」『東アジアからの人類学——国家・開発・市民』伊藤亜人先生退職記念論文集編集委員会(編), 85-102 ページ, 東京: 風響社.

吉原和男

- 2000 「再構築されるエスニシティ——北カルフォルニアのインドシナ系潮州人」『アメリカの多民族体制「民族」の創出』五十嵐武士(編), 293-311 ページ, 東京: 東京大学出版会.

- 2002 「多様な中国系アメリカ人」『アジア遊学』39: 5-18, 東京: 勉誠出版.

〔中国語〕

傅利曼

- 1985 『新加坡華人的家庭与婚姻』(郭振羽・羅伊菲訳), 台北: 台湾正中書局.

広東省地方誌編纂委員会(編)

- 1996 『広東省誌 華僑誌』広州: 広東人民出版社.

広東省人民政府僑務弁公室(編)

- 2002 『広東僑務簡報(13期)』7-8 ページ, 広州: 広東省人民政府僑務弁公室.

広州市地方誌編纂委員会(編)

- 1996 『広州市誌 卷十八 華僑誌 穗港澳関係誌』広州: 広州出版社.

海宴華僑農場(編)

- 2004 『農場誌(初稿)』内部資料.

黄小堅

- 2005 『帰国華僑の歴史与現状』香港: 香港社会科学出版社有限公司.

李明敏

- 2003 「社会人類学的視野中松坪華僑農場」『華僑華人歴史研究』2: 1-3.

李亦園

1970 『一个移植的市鎮：馬來亞華人市鎮生活的調查研究』台北：台湾正中書局。

劉朝輝

2003 「社会記憶与認同建構：松坪帰僑社会地区認同的実証剖析」『華僑華人歴史研究』2: 11-18.

梁英明

2001 『戦後東南亞華人社会变化研究』北京：昆仑出版社。

孫晟

2003 「重建家園：松坪華僑農場印尼帰僑群体研究」『華僑華人歴史研究』2: 19-25.

俞雲平

2003 「一个特殊地区的歴史軌跡：松坪華僑農場發展史」『華僑華人歴史研究』2: 4-10.

曾少聰

2004 『漂泊与根植—当代東南亞華人族群關係研究』北京：中国社会科学出版社。

周飛舟

2003 『『三年自然災害』時期我国省級政府对災荒的反應和救助研究』『社会学研究』2: 54-64.

庄国土

2001 『華僑華人与中国的關係』広州：広東高等教育出版社。

庄国土（編）

2003 『二戰以後東南亞華族社会地位的变化』廈門：廈門大学出版社。

[英語]

Barth, Fredrik.

1969 Introduction, In *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*, edited by Fredrik Barth, pp. 9-38, Illinois: Waveland Press.

Chin, James Kong (錢江).

2003 Multiple Identities among the Returned Overseas Chinese in Hong Kong, In *Chinese Migrants Abroad: Cultural, Educational, and Social Dimensions of the Chinese Diaspora*, edited by Michael W.Charney, Tong Chee Kiong and Brenda S. A. Yeoh, pp. 63-82, Singapore: Singapore University Press.

Fizgerald, Stephen

1972 *China and the Overseas Chinese*, Cambridge: Cambridge University Press.

Gosling, Peter L. A.

1983 Changing Chinese Identities in Southeast Asia: An Introductory Review, In *The Chinese in Southeast Asia Volume2 Identity, Culture & Politics*, edited by Linda Y.C. Lim and L.A. Peter Gosling, pp. 1-14, Singapore: Maruzen Asia.

Lam, Kit Chun and Pak Wai Liu.

1998 *Immigration and the Economy of Hong Kong*, Hong Kong: City University of Hong Kong Press.

〔新聞〕

『広州僑商報』2005年11月30日.

〔インターネット資料〕

「中国僑網」<http://www.chinaqw.com.cn/> (2008年1月20日).